

カカシの憂鬱

睡眠不足です

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

他里では、木の葉の白い牙として恐れられていた。

暗部として毎夜任務に明け暮れる生活に突如終りを告げる。

「はたけカカシこやつらの指導者になれ」

え？嫌ですけど。

目次

プロローグ	1
サバイバル演習①	4
サバイバル演習②	8
サバイバル演習③	13
サバイバル演習その後	16
暗部復帰	19
平和な一日	24
集落殲滅編①	28
集落殲滅編②	36

プロローグ

三代目火影からその話を聞かされた時、平和主義のぼんくら爺に苛立ちを覚えた。

暗部として仕事を黙々とこなしていれば、まだ少なからず里のために貢献したのではないだろうか。

何よりカカシが断ると確信していたんだろう。直前になって火影室に呼び出されたのだ。もう、時計の針は待ち合わせ時刻をとうに過ぎてている。過ぎているならば急いで行く必要もない。

何より俺は納得もしていないければ了承もしていない。ただ所詮、カカシも里の忍び火影の命令には逆らえず重たい足を動かしながら、教え子達が待っているという教室に足をすすめる。

一分一秒、大事にしななければいけない忍びの頂点がどういう仕事の仕方だ。反論を認めず、自分が正しいと緒言者のように宣う一種の宗教にも思える。あいにく、里に思いやりもなければ信仰精神などカカシにはない。

さらに任された班のメンバーは仕組まれたとしかいいようがない。
うずまきナルト

うちはサスケ

春野サクラ

この二人を組み合わせた時点で三代目火影の真意がわかる。

九尾の子、と疎まれ嫌われているうずまきナルトの現状に見てみぬふりをし、里の安泰を保っているこの現状。

そう火影はただ俺に厄介払いを押し付けただけなのだ。

四代目火影の教え子だから、何より里に尽くしているカカシならば正しい道に二人を歩ませてくれるだろうと忌々しいことにそう考えているに違いない。

何もわかつちやいない。

誰一人守ってくれなかったミナト先生を誰が慕っているというのか。

里のため人のためと平和主義を掲げているそれこそが八方美人、誰よりも人を守れず尚且つ俺の父さんを見下していると何故気づかないのか。

ミナト先生の子供だからなんだというのだ。

特別な感情も何も持ち合わせちやいない。

ただ面倒なことは起こさないでくれと思っただけだ。

関わりに合いたくもなければ、教え子じやなきや声をかけようとも思わない。

うちは一族の生き残りだからなんだというのだ。写輪眼の使い方を教授しろでも

?

冗談じゃない。この写輪眼はオビトのモノなのだ。

俺が写輪眼について語ることはない。

復讐と言おうと所詮実力がなければただの戯言。

実力があるうと真実を求めないその姿勢は、ただの子供の癩癩にしか見えない。つま

り雑魚。

何一つ好きになれる要素がない。

教室のドアを開けた瞬間

カカシの頭部に軽い衝撃と白い粉があたりに舞う。

「んーなんていうのかなあ

お前たちの第一印象は嫌いだ」

もつとも、今後天地がひっくり返ろうとプラスになることはないのだが。

サバイバル演習①

「俺の名前ははたけカカシだ

お前たちに好き嫌いを教えるつもりはないし

仲良くするつもりもない」

最悪だ。名前教えるのも嫌。

そのまま席に座らせ、教壇の前にたち

ひとりでにカカシは自己紹介を始めた。

不満げな顔でこちらを見てくる教え子達に、ため息を吐きたいのをグツと堪える。

「次はお前らだ」

「俺さ俺さ名前はうずまきナルト！好きなものはカップラーメン！もつと好きなものはイルカ先生に奢ってもらった一楽のラーメン」

イルカ先生：「うみのイルカか。」

アカデミーの教師だったか。ナルトに随分好かれてるようだ。そのうち、この班をうみの先生に押し付けるのも有りだな。

「そんなでもって将来の夢は火影を越す！」

里の奴ら全員に俺を認めさせてやるんだ！」

なるほど。この里を嫌いになるのではなく、認めさせてやるとききたか。火影が好みそうながキだ。

「わたしは春野サクラ！好きなものは… というか好きな人は… きゃー!!」

はあ。恋に恋する乙女ってね。

こういう奴ほど、勝手に自滅して死ぬんだよな。この世の中も平和になったもんだ。

「名は、うちはサスケ。一族の復興とある男を必ず殺すことだ」

一族の復興… ね。

お前しか生きてないの？それはつまりあれか？死人を生き返らせてくれるのか？違うだろ。お前が「復興」するということでもいいのか？このマセガキ。調子乗った事言いやがって、ただ兄を殺したいだけのブラコンが。うちはイタチの方がまだ可愛げがあったな。

「よし、わかった。個性豊かで結構結構」

まあとにかくどれくらいできるかぐらいは見ておくべきかな。何かあつたら俺が被害を被るわけだし。

「明日から任務をやるぞ。俺とお前らでサバイバル演習だ」

「どういふことだつてばよ」

「演習なんて散々アカデミーでやったし、それに先生対私達なんて無理ですよ！」

無理？ だろーな。

「無理といったな。お前は任務を受けた時、依頼人を見捨てて無理だからと逃げるのか。それなら忍びを辞めちまえ」

異論は認めないと反論を言われる前にカカシはナルト達の前から姿を消した。

カカシがいた場所に残ったのは空気に溶けた白い霧だけだった。

「はあ!? 逃げた!! もうどうしろっていうのよ!!」

「俺がサクラちゃんのこと守ってやるってばよ!!」

「あんたになんか頼らないわよ!!」

「そういえばさ、どこでやるんだってばよ」

「えつまさかカカシ先生言い忘れてる?」

しやるならーふざけんじやないわよ!! と内なるサクラが叫ぶ中、それはないつてばよ

!!カカシ先生!! と青ざめるナルトたちの様子を見てサスケはその場から離れた。

@@@@

…… 待ち合わせ場所言うの伝えてないな

まあいつか

カカシは相手をするのも面倒になり、変わり身の術で姿を消したのだった。

本当に面倒くさい。里のため、人のため信条は嫌いなのだ。人間であれば心の奥底に必ず自分のためが自己主義が存在する。カカシは自分さえ良ければそれで良いという考えだった。

里の人間のために、何故俺が犠牲にならなくちゃならない？散々、父を俺を見下し馬鹿にしてきたお前らを助けるわけ無いだろう。

まあ、それはともかく任務だ任務。

今日は前から怪しい動きをしている忍びの宿に奇襲をかけ抹殺する任務があったはずだ。

集合場所に向かう足を早めようとした時、カカシの頭上付近で任務鳩が飛行していることに気がついた。

遠目から見ると鳩の足元には紙が括り付けられている。軽く手を上げると、紙がちょうどカカシの手元に落下してきた。内容を確認し、とうとう抑えきれなかったため息ひとつ。

任務がなくなった。

奇襲が延期になったわけでもなく、火影の差し金だろう。確認するに、暗部の仕事はしばらく来ないように火影が調整をしたようだ。まったく余計な事をする。

カカシは行く宛もなく仕方なく自宅に踵を返したのだった。

サバイバル演習②

「やあ諸君おはよう」

「おっそい!!」

遅いも何も、お前らが勝手に早く来たただけだろ。

「あははー… っってお前らよくここがわかったね」

「カカシ先生の親友だっというゲジ眉先生が教えてくれたんだっばよ! きつとカカシならここだろうって!」

「正直半信半疑だったけど… もう大変だったんですよ!」

あー… 余計なことを。あいつにこの場所教えたことなかったはずなんだけど。てか、親友じゃねえよ。演習場に教え子が来なかったので辞めます的なことを言って逃げたことも考えていたんだが。言い訳が厳しい? ほっとけ。

「はいはい。まあそれはともかくだよ

この鈴を俺から取ったやつが合格。

取れなかったら、まあ忍びを諦めろ」

「えー!!」

さて、10秒数えるからその間に

10：： 9：： 8：：

サスケとサクラは移動したみたいだな。

7：： 6：：

5：：： 4：：

いやー気配がずっと動かないからわかってたけど。お前マジか

「ナルトなにしてんの」

「正々堂々挑むってばよー」

はあ。正々堂々ね。

ナルトはそう言い終わった瞬間カカシに向かって殴りかかってきた。上体を横にそらして避けるとさらに追撃がかかる。

だが、なんの仕掛けもない体術。

早さも何も優れていない。

つまり攻撃にもならない。

カカシは避けるのをやめ、一步ナルトの踏み込みより前に出てクナイを首に当てる。

「はい、死亡」

「なっ！まだだっばよ!!」

ナルトはカカシから距離を取り、印を組んだ。

「多重影分身の術!!」

カカシの周りに父親譲りの黄色い髪、ナルトが襲いかかってくる。

「んー…」

なんていうか気に触るんだよなあ。

その ミナト先生と似たまっすぐな目 が。

まあ、なんだ。ナルトには

「退場してもらいますか」

一斉にカカシに飛びかかってくるナルトを

避けながら片腕を掴み同じナルトにぶつけつつ、本体のナルトに微笑を浮かべた。

「ナルト、終了だ」

お前は寝てろ。

カカシは額当てを上にあげ、その眼を発動させる。

紅い眼がナルトの目とかち合い、ナルトはその場に前のめりに倒れた。

と、同時にカカシの背後で、分身のナルト達は音を立てながら姿を消していく。

「はっはっはー。弱いなあ。もうナルトは終わったぞー。次やられるのは誰かな?」

カカシは額当てを元に戻し、わざとらしく声を上げる。

木々のざわめきに紛れ、息を飲む音が聞こえる。気配が隠せてない。これはサクラだな。

「言つとくが、俺はここから動かないからな」

はやく終わらせ帰りたいが、暗部の任務も奪われてしまったし気長に待ちますか。

カカシはイチャイチャタクティスを取り出し、読書に勤しむことにした。

@@@

inサクラ

多重影分身の術をナルトが仕掛けた時は、もしかしたらって期待したけど瞬殺。

あの馬鹿、隠れもせずなに見つ向勝負してんのよ！ありえない

「はっはっはー。弱いなあ。もうナルトは終わったぞー。次やられるのは誰かなあ？」

絶対無理！勝てるわけない！

大体上忍なのよ？手加減してくれたっていいじゃない！こんなの初めから勝敗は決まってるじゃない

「言つとくが、俺はここから動かないからな」

言葉の通り、カカシ先生はあそこから動かないつもりみたいだ。何か本を取り出し、読み耽っている。

カカシ先生が動かないなら、こっちから行くしかない。

でも一人じゃ絶対無理！

そうよ！サスケくんはどこにいるのかしら。もしかしたら、カカシ先生があそこから動かないことを聞いてないかもしれない。上手く合流して、サスケくんに情報を伝えれば私に対しての好感度も上がるし二人で戦うことができるはずよ！

サクラはめくるめくサスケとの妄想を頭に描きながら、そつとその場を――

「サクラ、お前の気配うざいから寝てくれる？」

離れることはできず、その場に倒れ伏すのだった。

あ……れ……？

急激に意識が遠のき、聞こえたのは

「ほんと、目障り」

冷たく音色に嫌悪を含んだカカシ先生の声だった。

サバイバル演習③

来たな

僅かな空気の乱れを察知したカカシは、サクラの側を離れ軽く跳躍する。数秒後には足元にクナイが突き刺さっていた。そのまま左右から飛んでくるクナイを避け、林から開けた場所まで移動する。あらかじめ、トラップを仕掛けていたか。

しばらくすると、クナイの攻撃も止み木々のざわめきだけがこの空間を支配する。残るは一人、サスケだけ。

「なにになに、サクラを助けにでも来たか？」

前方の木の後ろから、鋭い眼光のサスケが姿を現わす。カカシの姿を視界に収めるな否や素早く馬、寅と印を結び終えていたサスケが、空気を肺一杯に溜め込んで体を反らした。

「火遁・豪火球の術！」

サスケの口から吐き出させる炎がカカシがいた場所、あたり一面に広がる。

カカシは瞬時に土遁の技で地中へと身を隠した。

「何故、写輪眼をうちは一族でもない

お前が持つているんだ応えろ!!」

懐かしいねえその言葉よく言われたよ。

うちは一族は他人を嫌悪することしかできないのか。あいつとは大違いだ

サスケは炎を吐き出し終わった後、カカシの姿を視認することはできなかった。辺りの気配を探るが確認できない。

「くそっ!」

慌てるサスケの気配を地中で感じながら、炎が完全に沈静化したことを認識した。

土遁・心中斬首の術、地中からサスケの足首を掴み引きずり込み生き埋め状態にすると共にカカシは地上に上がり砂埃をはたいた。

「応える義理はないね」

サスケの憎悪に燃える目と嫌悪に染まったカカシの眼が互いの思いを語っていた。

「お前、弱いよ」

チャクラがまだ足りないはずなのに、下忍にして火遁・豪火球の術を習得しているのはさすがだと言えるだろう。でも、それだけだ。

ナルトが挑んできているのを見て、サスケが俺の隙を伺っていたのはわかっていた。

だから、ワザと写輪眼を使ってみた。

うちは一族であるお前が？俺の存在？を容認できるはずがない。

この写輪眼を許せるはずがない。

「ほんと、目障り」

その憎悪に染まった目があいつらを沸騰とさせる。

あいつが写輪眼を奪ったんだ。

あいつがオビトを殺したんだ。

うちは一族でもないのに何故写輪眼を。

かつて、神無毘橋の戦い後帰還した時のうちは一族の反応が思い返される。

「くそっ！俺をそんな目で見るな！」

何を思ったか、身動きが取れなくなつたサスケは急に怯えを含んだ目で体をよじり距離を取ろうとする（体をよじつたところで動けないのだが）

どんな目で今、サスケを見ているのか。

カカシにはわからなかった。わかろうとも思わなかった。どうでもいいことだ。

そんなサスケを一瞥し、カカシは少し離れた三本丸太まで足を動かしその真ん中の丸太に寄り掛かった。

どこまでも広がる青空に目を向けながらカカシはただ、何も考えず任務に身を委ねることが出来る暗部に戻りたいと思うのだった。

サバイバル演習その後

i n 火影

「では、失礼します」

ぱたんと静かに音を立てながら扉が閉まる音を聞いて、視線を手元の煙管（キセル）から立ち昇る煙を見やる。

頭の中で、数分前の出来事を思い返しなが

深く紫煙を燻（くゆ）らせた。

「どうしたカカシ」

突然の訪問者に内心首を傾げながら入室を言い渡すと、カカシは真剣な面持ちで火影の中央にて跪き、言葉を発した。

「火影様。今回私の班はサバイバル演習を行ないましたが、成功したものは誰一人おりませんでした。私は力持たざる忍びを受け持つことはできません。命を預かる上忍として、指導者の責務を変えていただきたい。」

「…それはならぬ」

「どうしてですか。お言葉ですが、火影様。私は演習に失敗した忍びを認めることはできない。これは正当な理由です。他の班も本日は受け持つ下忍の力量を図るため、上忍に一任していると承っております。何も班を解散し、アカデミーからやり直しをと言つてゐるわけではありません。私が認める事ができないだけです。他に適任者がいるはずです。火影様今一度考え直していただきたい」

そう反論の意を唱えるカカシは一息に言い切ると火影様と目を合わせた。

火影は、しばし黙り込むとそれで何が言いたいと続きを促すかのような表情でカカシの鋭い眼光を見返した。

「：： 私を元の暗部の任に戻していただきたい」

それがカカシの真意であろう言葉が飛び出した。暗部として危険を省みず任務を遂行する様はいつからだっただろうか。白い牙として他里に名を馳せブラックリストに載るほどの力量。それは一介の上忍では、とても果たせない責務であつた。それゆえ、カカシを暗部の任に戻せという上層部の声があるのも確かであつた。

しかし、火影はどうしてもミナトとクシナの忘れ形見であるナルト、うちはの生き残りであるサスケをカカシに預けたかつた。

火影は里の長であり、ナルトやサスケだけを特別扱いすることができない。そのため、何かあつた時に迅速に行動できる人物であらねばならない。そこに白羽の矢が立つ

たのがカカシであった。忍びとして力量に申し分ないが、人と関わることを避けている態度が気にかかっていた。この機会に、庇護すべき存在を与えカカシに対してもプラスになるであろう班の存在であった。

ミナトの教え子であるカカシならば大丈夫だと火影は上層部の反対の意を言い包めたのだ。

なにかあろうとも、今更カカシを班から外す事はならぬ。

これはカカシのためにも良いことなのだ。

「では、失礼します」

カカシは返答のない火影を一瞥し、踵を返した。

さて、どうやってカカシを説得するかと考えながらナルト達の様子を伺うため水晶玉に手をかざした。

水晶に、それぞれ倒れこむナルト達が映し出された。

溜め息を吐く火影の前に潜んでいた暗部が片膝について頭を下げると、火影は回収の令を出し、その瞬時暗部は姿を消した。

ナルト達がここに連れて来られるまでの間、

どうやってこの状況を回避すべきか火影は手元の煙管を軽く吹かしたのだった。

暗部復帰

火影室の扉をノックの音もなしに開ける音がした。杖をつきながら入ってきたのは体の半分を包帯で隠している「根」の創設者かつ暗部の長である志村ダンゾウであった。

「なにようじゃ」

このタイミングで入ってくるとは何やらヒルゼンは嫌な予感がした。この男は自分からは動かさず暗部を通してやり取りすることが常であり、ダンゾウとは意見の対立ばかりである。

「ヒルゼンお前の考えは読めている」

ヒルゼンは眉間にシワを寄せ訝しがる表情で声をかけた。

「うずまきナルトのことか」

それとも、うちはサスケか。

目的は、九尾の排他的対処か。

うちは一族の復讐の目を詰むことか。

どちらにせよ、また意見が対立することは目に見えていた。

「はたけカカシを暗部の任に戻す事で上層部は合意した」

「なんとつ勝手なことを」

「勝手だと？可笑しいなヒルゼン」

はたけカカシの暗部解任の話に強く反発したのは上層部だった。しかし、何を言うでもなく暗部の長であるダンゾウが否定しなかったため認められたのだった。どんな意図があれば、はたけカカシが第七班に就任することは合意であったはず。

「何故じゃ、お主も」

「どう語ろうとも甘い考えに違いない。」

『どう足掻こうとも火影様は解任してくれない』と意見を述べた者がおつてな。助力したまでのこと」

なぜだ。何故、ダンゾウがカカシに手を貸す事態になるのだ。

想定外の出来事にヒルゼンは唇を噛み締め声を絞りだす。

「どういうことじゃ」

「説明が必要か？簡潔に言おう。はたけカカシは暗部の復帰と班の上忍を兼任する。既に決定事項だ。お前が今から何を言おうとも、御意見番の意見は変わらんだろうよ」

ダンゾウはヒルゼンの目が険しくなるのを見て、うつすらと口元に薄暗い笑みを浮かべた。

「だからお前が画策している再試験も必要ない」

カカシの意に反し、第七班に再試験を与える計画を建てていたことを知られていたか。

兼任するということは班の上忍を務めるということだ。確かにこれでは再試験の必要がなくなる。

ヒルゼンはそこまで考えて第七班の存在を思い出す。

暗部に回収の任を与えてから、しばらく立つ。そこまで時間が過ぎたわけではないが、それでも遅いんではないだろうか。まさか

「どうしたヒルゼン。浮かない顔をしているが……。ああ、お前が派遣した暗部には眠ってもらっているぞ。誤報を伝えてはいけないからな、こちらから正しい内容を伝えるよう指

示を出しているから気にすることはない」

流暢に喋りだすダンゾウはヒルゼンの困惑が手に取るようにわかり機嫌が良いようだ。

「ダンゾウなにを考えておる」

わからない。ここまでダンゾウが手を貸す理由がカカシにあるのか。それとも真の目的は九尾か写輪眼か。

ダンゾウは問いに何も答えず火影室を出ていった。残されたヒルゼンはしばらく頭

を抱えていたが、深く椅子に腰掛け煙管を深く吸い込んだのだった。

暗部が音もなくヒルゼンの前に姿を現す。

「任を授かった暗部三名が死亡している事を確認。うずまきナルト、うちはサスケ、春野サクラの姿は確認できず。随時、詳細を追っています。」

「よい。追うのを止め」

第七班の殺害はダンゾウ自身の首を絞めることになるはず。そこまでの動きはしないだろう。後日、ダンゾウが手引した暗部がナルト達に何を言ったのか探れと令を出し報告に来た忍はその場を去った。

自体はともかく、良い方向に進んでいると思っただけでいいはず。あとからでも、カカシの思いを聞き出し調整することはできるはず。

なのになんじゃ、この嫌な予感は。

何もかもが見透され道を示すかのような…。

いや、考えすぎだ。

後日カカシに任を与える際に釘を差しとくか。ダンゾウと関わるのは止したほうが良いと。

次の日カカシは火影に呼び出されD任務を受けると共に暗部復帰の件や第七班の扱いについて小言を言われるが、受け流すばかりで撃沈する火影の姿があったとかなかつ

たとか。

その顔がどことなく疲労にまみれて見えたのは気のせいではないだろう。

平和な一日

i n サクラ

「今日の任務はー」

「ねえねえナルトこの間のこと覚えてる?」

サクラはカカシ先生の様子を伺いながら、ナルトにそつと近づき声をかけた。

「んー気づいたら家の前にいたってばよ」

「やっぱり? 私もなのよ!」

あの演習の後、気づいたら家の前で寝ていたようで家に帰ったまでの記憶がまったくない。ナルトも同じってことはサスケくんもかしら?

「つて、君ら話聞いている?」

「き、聞いてます!」

サクラの目の前にカカシ先生の険しい顔が突然視界に映り込む。

「ほー、じゃあなんて言ったか言ってみ」

「えっえつとー…猫探し?」

「んー…」

やばい間違えた?!

ドキドキしながらカカシ先生の反応を疑うと、正解と言いい元の位置に戻った。

「というわけでお前らぶちの猫探してこい。見つけたらここまで報告に来ること。以上」

そういうとカカシ先生は気に寄りかかり、腰の忍具ポーチから本を取り出し読み始めた。

「げっ、またカカシ先生。読書かよ」

「サスケくん…この間の演習後なんだけど…」

あつと、やつぱりなんでもない…」

サスケはサクラを一瞥し、怪訝そうな表情で顔を背けた。

演習後からサスケくんの態度はどこか冷たい。ふとサスケくんを盗み見ると、カカシ先生に殺意を向けているような怖い顔をするのが増えた気がするのだ。

前途多難…。このままで第七班やっていけるのかな。

サクラは言い知れない不安を覚えた。

演習だって、誰一人カカシ先生を倒せた者はいないと聞いていた。普通なら不合格ということになるんじゃないだろうか? いや、不合格になったら困るんだけど…。こう

やって任務が与えられているってことは忍として認めてくれたってことでいいのよね？なにネガティブになってんのよ私！せっかくサスケくんと同じ班なんだし、アタックあるのみ!!

「うぎゃー！」

サクラは自然とガッツポーズをしていた手を下げながら、ドサツという音とナルトの声がした方を向いた。

ナルトはひとりでスライディングを決め込んでいた。何やってんの、あいつ。

急激に気持ち下がるのを感じながら

サクラはシラけた目で一步下がった。

「くっそお！カカシ先生避けるなよ！」

「いや、避けるでしよ。なに見ようとしてんの！」

「その本の中身を見せろってばよ！」

会話から察するにナルトはこっそりカカシ先生の背後に回り込み、中身を盗み見ようとしたようだ。そして見事に避けられたと。

「はあ」

「なっ違うってばよ！サクラちゃん！」

「何が違うのよ！くだらないこととして！私が馬鹿みたいじゃない！」

「サクラちゃん馬鹿なのか？」

「あーもう！だから！」

「サクラ、ナルト」

あつやばい

恐る恐るナルトとサクラは顔を向けると、

それはいい笑顔でニツコリと…

「ひっ！いい行くわよ！ナルト！サスケくん！」

おい！離せというサスケくんの声を聞き流しながら二人の手首を掴み全速力でサクラは駆け抜けた。

その後ろ姿を眺めながら、カカシは手元のイチヤイチャタクティスを閉じたため息を吐いた。

「そつちに行きたかったなあ」

集落殲滅編①

さてさてあつちは退屈に子守している頃かな。

「対象確認」

散と指で合図し、各自指定の場所へ散らばった。

任務内容は「抜け忍の潜伏疑惑がある調査」

真意は「潜伏疑惑のある集落の殲滅」であると認識している。本当に抜け忍が潜伏しているのか、そんなのは関係ない。

暗部は自分を入れて三名。スリーマンセルだ。

集落は森林に隠れるかのようにぼつんぼつんと一定の感覚を開けて存在していた。

右前方2時の方向から何やら怒鳴り声が響いた。次の瞬間、濃い霧が辺りを包み込む。先程見えていた集落は霧に隠され見えなくなってしまった。

カカシは瞬時に地を蹴ると、近くの木に飛び移りクナイを投げた。姿は見えないが気配を感じる。

数は多くない、もしや一人か？

すつと気配が急に消えたことを確認する訝しげながらもカカシは木から木へと移り

進んでいく。そうこうしていると先程所定の位置に着いた暗部の一人タンダと出くわした。

タンダは今回集落の位置を把握する為、感知タイプとして収集された忍びである。

「何があった」

「わかりません急に霧が濃くなって、対象の集落を見失いました。」

「どういふことだ」

「集落が消えたんです！」

突然ありえない現象が起きた事に動揺を隠せないタンダはカカシの言葉に被せるように話し出した。

「幻術の類いを疑いましたが違います。先程9時の方向から怒鳴り声が聞こえて、それから。」

「待て、9時の方向から？俺は2時の方向から怒鳴り声が聞こえたんだ」

「それはおかしいですよ。だって2時の方向には、そもそも集落なんてないじゃないですか」

カカシは僅かに瞳目を開いた。

そういうことか。

その仕組みをカカシが理解した時、立ち止まり木に記号をクナイで削った。

「何してるんですか」

「お前もう一度確認してくれないか」

タンダは素直に目を瞑り、手で印を組みながら周囲を探っているようだ。
ざあつと木々が揺れ動く。

「……そこに人の気配を感じます」

タンダは力カシが削った木に指を指した。

「どういうことですか？」

「固有結界だ」

円形状に結界を貼り対象を閉じ込める事ができる。範囲は術を発動する忍びの力量によるだったか。

「集落全体を覆っている侵入者対策だな」

俺のやる事は変わらないが、面倒だな。

「どうするんですか？」

不安げな顔で尋ねてくるタンダに嫌気が差す。

「……自分で考えなよ俺は子守しにきてるんじゃないんだ」

木の葉に影分身の俺を一人残してきたが、ここにも駄作がいたか。

「なっ…俺は今回初めての任務で…！」

タンダはカカシに言い募ろうとしたが、少し先に小さな気配…人ひとり分の気配を感じ印を深く集中した。

その正体がわかるな否やカカシの静止の言葉も聞かず、タンダは木から降り走り去った。

カカシは冷徹な眼でタンダの後ろ姿を見つめていた。

「子供がつ…なんで…集落の子か？」

薄汚れた服とも呼べない布切れを纏い、どうやら気絶している様子の子供を膝に抱き上げる。

「…あ…」

「あっ！目が覚めたかい？」

軽く身動きした子供が何かを喋ろうとしているようだが、声がかすれよく聞こえない。

自然とその声を聞こうと前のめりに耳を傾ける。

「…ばーか」

その言葉の意味を理解する前に、タンダは意識を失った。否、

「死んだか」

近場の幹の上にしゃがみ込み、その無様な死に様をカカシは無感動に眺めていた。敵地に赴いているのに、なんと馬鹿なやつ。

ひよいと倒れてくる死体を避け、手の平の上で刀を廻しながら子供が白狐のお面を被った忍びに問うた。

「あれれ、お兄さんのお仲間じゃないの？ いいの？ 殺しちゃったよ？」

「いや、手間が省けた。そいつ、対象、だったから」

「あれ？ そう。ならいいけど」

「ただそれとは別に不満があるんだ」

「なに？ 聞いてあげる」

「お前……集落潰したろ……」

あれお兄さんの獲物だったんだけど？」

ドスの聞いた低い声が辺りに響いた。

子供はキョトンとした顔をした。

「あははははは!! お兄さん苛々してるの？ ごめんね! でもあの集落は僕の獲物だったん

だもの!!弱肉強食だよね!仕方ないよ!

直接被った血に塗れながら、腹を抱えて笑い出す。

「あーそ」

じゃあ、お前を喰らうわ

不意に視界が揺れた。瞬時、背中に鈍痛が走る。木々のざわめきが聞こえ、木に叩きつけられたのだと能が理解する。

目に見えない攻撃に舌打ちする。

攻撃を食らった腹部の状態を確認すると、自分の血液が流れているのがわかる。

「どどうして・・・どうしてだよおおおおお!!」

土を握り締めながら子供は白狐の面を付けた忍びを睨む。

「どどうして・・・からだよ」

白狐はゆったりと子供に近づく。右手に青白い光を瞬かせながら。

チキチリと不気味な音を立てているそのチャクラの塊に逃げ出そうと後ずさるが、ただ手をつくだけだった。

「なんでなんでなんで!!ボクはただ人間とも思わないあの集団を!殺しただけじゃないか!なんでぼくをころそうとするの?!僕は悪くない!!悪いのはボクを虐めたあいつらだ!!」

「…… はあ…… 例えお前が復讐のために人を襲おうと。ただの狂人だとしてもどっちでもいい」

そのまま千鳥を子供の腹に貫通させる。

刀で、クナイで、術で何も反撃を返さない。

ろくな抵抗もしない雑魚の体を右腕を振りかぶって重力のまま投げ捨てた。

子供の体は地面に叩きつけられる前に、霧になつて空気に拡散していく。

「…… お遊びに付き合つてる暇ないんですけど」

目の前の景色に歪みが生じたと感知した瞬間、少し先に集落が見えた。

「んー……」

さっきの子供は操り分身だな。

「固有結界を敷いていたのもそいつの操り主か？ いや、逆だな。この結界を解いてくれたな。何故、手助けするかも正体もわからないがまあいい。つまらない愉快犯に弄ばれただけってことか。あー…… 苛々する。」

カカシはひとつ大きく深呼吸すると、本来の目的を遂行する為に集落へと向かった。

『やっぱりその眼ほしいなあ』

ニタアと嗤った青年が “寸前” までその眼を凝視し観察していたことにまだカカシは気づいていない。

集落殲滅編②

カカシは一つ一つと集落に忍び込み、残骸を目にしていた。ほぼ全滅状態と言っていないだろう。そこにあるのは死体しかない。

もう一人派遣された暗部の死体を発見したが、争った形跡はなく後ろから首を一突きされているようだった。油断でもしていたのか。まあ最初から何も期待はしていない。ただ無様なその有り様を一瞥し、今後暗部にマシな人材を増やせと意見を述べてやろうと決めた。

その死体を足蹴にしながら、また一つ隣の敷地に入り込み獲物がないか物色する。せつかく暗部の任に復帰したのに、これでは拍子抜けである。血に染まっていない自身の暗部服を見下ろし仮面の下、カカシは落胆の色を隠せない。

これでは何の為に暗部服に袖を通したのか。ここまで来た時間が無駄に過ぎなかった。

結局、道中襲いかかって来た忍びの操り主もわからず。集落も残滅している有様。苛立ちはあるが、獲物がない以上カカシはこの場を去るしか選択はなかった。

深追いする程、何か思い入れがあるわけでもない。

ダンゾウ様には不審な忍がいた旨を報告し、任務は既に終結していた事をお伝えするのみ。

この現状を創り出した奴の見逃しがないか確認はしてみたが、特に取りこぼしもないようだ。

仕方がない帰還しよう。

次の任務でこの鬱憤を晴らせばいい。

そうと決心がつけばカカシの切替は早かった。

元来た道を戻り木の葉の里へ。

謎の襲撃、それを操る者、残滅した集落、死体となった暗部二名の亡骸

どれもカカシにとって、どうでもいい事であった。

この事は記憶の片隅にも残らない。

いつもの　取るに足らない　任務なのだから。

木々に囲まれている集落。

その役目は集落を隠す為の目くらましである。その本来の役目を果たすべく、カカシの手によつて無数の木々は集落へと倒れこむ。

本来であれば火をつけ跡形もなく消し去るのがベストであるが、木々で囲われてる

故、どこかで範囲を見定め消化しなければいけないのも事実。
ならば埋めてしまえばいい。

この日とある一つの集落が潰えたことなど誰も知る由のないことなのだ。
そうして今日という一日は終わる。

「次の任務で殺す」

誰に言うでもなくカカシはぽつりと眩き、その場から立ち去った。

@

木々で積み重なった残骸の成れの果て。

青年は紅い雲模様の黒いマントを靡かせて、その上に鎮座する。

「……あの眼もいいけど、殺意に染まった表情も見たいなあ」

「……次の任務に付いて行こうかなあ」

「ふふふ……楽しみだなあ……ねえ？ そう思わない？ ボク」

問いかけに応えるものはいない。

ただ夜が明けても青年の独り言が止むことはなかった。